

父が若年認知症 進学之苦勞

お金の心配や理解されぬつらさ

進学や就職など人生の節目と介護が重なる人たちがいる。大学生の男性は、自身が中学生の時、父親が65歳未満で発症する若年認知症と診断された。高校も大学も経済的な不安を抱えながらの進学だったという。

通信制大学に通う東京都の大橋尚也さん(26)は、共働きの両親と3人暮らしの家庭で育った。

診断を受ける前に父は家族に相談せず仕事をやめ、家にこもるようになった。母が働き続けて家計を支えたが、生活費をまかなうだけで精いっぱいだった。大橋さんは高校受験で都立高校1校のみを受け、なんとか合格した。

間違ったことは許さない厳しさと優しさを併せ持つ父だったが、発症後は急に怒ることが増えた。「母の胸ぐらをつかんだり、僕に手を上げたりしたこともあった。認知症によるものだとわかってはいても、父がなぜ感情的になるのか受け止めきれず、苦しかった」という。

忘れられない言葉がある。予備校には行かず独学し、浪して今の大学に入った。浪人中からスーパーでアルバイトし、家計を助けた。父は少しずつ症状が進み、言葉が出づらく、食事やトイレなどで介助が必要になった。介護サービスを利用して自宅で暮らすことが難しくなり、大橋さんが大学2年の時、精神科病院に入院した。その後、父はがんも発病した。入院や治療で経済的負担が増え、生活費のためのバイトで授業を休んで単位がとれないこともあった。



大橋尚也さん(右)と父が2012年、当時利用していたデイケアの家族会で高尾山にハイキングに行った時。父の外出に付きそつとも多かった(大橋さん提供)

思い出もたくさんある。「進行する病気なので、父が診断されてから、いつまで一緒にいられるかを考えて、父のことを優先してきました。だから、後悔はしていません。ただ、お金の心配や周りにわかってもらえないつらさはずっと抱えていました」

立教大助教の田中悠美子さんは、親が若年認知症になった時、「経済的な困難を抱えるなど、自立する途上にある子どもを抱える特有の課題がある」と話す。田中さんは、若年認知症の親を介護する子ども世代のピアサポートグループ「まりわっこ」を運営し、リアルやオンラインでこうした人たちの交流の場をつくってきた。

今年1月、ウェブサイト「若年性認知症 Information for children」(<https://youngcarer-salon.com/>)

介護担うヤングケアラーに支援策 「18歳以上の子へも充実を」

家族を世話する18歳未満のヤングケアラーについて、国は今年、支援策をまとめた。ケアマネジャーなどの専門職が状況を把握することや、子どもを「介護力」とみなさず、子どもへの生活に配慮して介護サービスの利用を調整すること、ピアサポートなど当事者や支援者による相談体制づくりを進めることなどが示された。

田中さんは「ヤングケアラーの年代で若年認知症の親がいる子どもにとって、課題への対策が示されたことはよかったと思う。一方、18歳を過ぎてても介護が続く人はいいて、親の病気のために家庭の収入が不安定だと、進学や就職の選択肢が制限される状況がある。奨学金など、18歳を過ぎた子どもへの直接的な支援も充実させ、切れ目なく支えていくことが必要です」と話す。

(畑山敦子)